

『松井翠声の上海案内』におけるシャンハイ・イメージ

What Japanese saw in Shanghai before WWII:
A note on Matsui Susei's Shanghai City Guide

徐 青
Xu Qing

(復旦大学歴史系博士後研究員)

【摘要】

論文通过战前日本的大众娱乐杂志《摩登日本》特派员松井翠声所著《松井翠声的上海指南》一书，揭示了“八·一三”事变之后在日本大众眼中的上海形象，这是 我们所熟识的“他者”否定模式的全班出演。松井为迎合时局，按照当时的报道模式对上海的形象进行了全面的攻击。但是即便在战争时期，松井最终仍难以否认上海的魅力无处不在，坦言上海这个不可思议的城市给他留下了深刻印象。

キーワード 上海指南 松井翠声 八・一三事变 上海形象 (シャンハイ・イメージ)

1. 「上海（旅行）案内」の研究

日本上海史研究会のデータベースによると、1853年に日本国内最初の『通航一覽』が出版されて以来、上海在留邦人の数¹⁾は日々増えつづけた。それに応じておびたしい上海に関する案内、概覧、要覧、一覽、便覧、年鑑や大観などが出版されていた。1930年代半ばには、上海の在留邦人の数も2万人を超え、彼らの生活に便宜をはかり、新しく参入する者たちのための手引書がもとめられたからである。

なかでもよく知られているのは、島津長次郎『上海案内』（金風社、1913年）、杉江房造編『新上海』（日本堂、1918年）、上海日本商業会議所編『上海概覧』（上海日本商業会議所、1921年）、米澤秀夫他『大上海要覧案内』（上海出版社、1925年）等があるが、それらに関する詳細な研究は未だ現れてはいない。

近年では、上海を訪れる人や上海で会社を設立する人は日々増えており、それに伴って、旅行案内書類がまた増え始めている。その中には、広岡今日子・榎本雄二の『時空旅行ガイド大上海』（広岡2006）等がある。

『時空旅行ガイド大上海』は、「大上海の散歩術」と「悦楽の大上海」との二部に分けられている。第一部の「大上海の散歩術」はさらに、共同租界²⁾、フランス租界³⁾、南市、蘇州河以北というように分けられていて、その第二部の「悦楽の大上海」は、細かく上海モダン・ポスター、ボルシチ、スイートホーム、クラシックホテル、幻の上海ダンスホールから見た音楽、1930年代の都市小説からみる上海等を扱っている。

広岡がその「まえがき」に記しているように、その目的は次のようである。「西洋と東洋、新と旧、上海をたどるとき、よく使われる言葉です。中国なのに、洋館がいっぱい。築80年の大理石建築の対岸には、浦東の未来都市。そんな「いま」をつくった「むかし」がもっと知りたい。この本はそんな考えから作られました。それぞれの書き手が好きな「むかしの上海」を自由きままにつづっています。あなたの好きな「むかしの上海」がこの本から見つかればいいですね」（広岡2006）。

1) 1893年の866人から1911年の7,036人に増え、1935年には20,000人、1937年には100,000人というピークに達した（高崎2002参照）。

2) 1863年、アメリカ租界は、空間的にも行政的にもイギリス租界と合併した。以後英米租界は、共同租界（公共租界）と呼ばれ、フランスを除く各国がここに進出して拠点を置き、集住するようになる（高橋1995：39参照）。

3) フランス租界は1849年に、1862年には参事会（中国語では工部局と翻訳された）から分離し、公董局（行政執行機関）を別に設立させて独自の行政を開始する。ただ、フランス租界公董局章程には、参事会の総董は領事の兼任であることが明記されており、イギリス租界と比較すれば、現地上海に居住するフランス人の本国政府からの独立性は弱かった（高橋1995：39参照）。

こうした「上海ガイド」の研究として、大阪市立大学都市文化研究センター上海サブセンター編『近現代の上海・大阪の空間と社会』研究メンバーの一人である西部氏の「近代上海を地理学するための予備的考察—在留日本人をめぐる研究展望と上海ガイドの紹介を中心に—」（西部2006）がある。「予備的考察」とはいえ、この分野の上海研究は未だよく開拓されていない状況からすれば、有意義な研究である。上海研究において、旅行ガイド、都市ガイドという領域は、理論的にもまだまだ曖昧な部分が多く残されており、今後開拓が大いに期待されているところである。

本論文の研究対象は、山下武、高崎隆治主編『上海叢書』第6巻の『松井翠声の上海案内』（原著横山隆発行1938年、以下『上海案内』と略す）を主とする。さらにそれを上海档案館所蔵諸資料で補完している。

『上海案内』は、夥しい“上海案内”研究資料の中心に位置づけられるべきものの一つである、と私は考えている。『上海叢書』に収録されているものの、この案内に関する研究はほとんどない。管見にして、これに言及している文章は、平野純編『上海コレクション』に『上海案内』の最初の三節が載録され、その「解説」において、平野が次のように説明したものだけである。

「……『松井翠声の上海案内』は三十八年に出版、娯楽雑誌「モダン日本」の特派記者として前の年におきた第二次上海事変の「上海銃後」を見て歩いた。題名でわかる通りレストランや映画館などのタウンガイドも同時に併録。真面目ぶった軍国美談が多かったなか、娯楽読み物に徹した異色の戦意高揚（？）ルポである」（平野1991:168）。

1930年代の「上海ガイド」や「上海案内」などについての研究がそもそも少ないということばかりではなく、ここで私が『上海案内』を敢えて取り上げるさらに重要なポイントは、日中戦争勃発直後に日本の男性、女性、そして子供たちの眼にどのような上海が映っていたのか、つまり、日本に占領された直後の上海は、どのようなイメージで日本人の眼に映っていたのか、第一次上海事変の頃とそれはどのように変わったのか、などといった問題について考える手掛かりとしたいというところにある。西部論文でも、『上海案内』は取り上げられていない、と同時に、戦前日本ガイドによる上海言説の批判的な研究はきわめて不十分なのである。

『上海案内』が出版されたのは1938年1月、松井が上海に渡ったのは前年11月である。この案内の出版は1938年夏の徐州戦に始まった武漢攻略戦の際に編成された「ペン部隊」による出版物の性格とは異なるものであった。この段階での各雑誌の特派員には、日本国内世論の影響を受けるのはもちろんのことではあるが、その発言にはかなりの自由度があった。本論文ではそれを確認していくことになる。

むろん、この点については、当時の日本社会の状況をもっと精査しなくてはならないが、当時の上海東亜同文書院の図書室でも、マルクス主義文献を含めて比較的自由にさまざま

な書物を読むことができたという証言もある⁴⁾。軍国主義化していく日本において、他者をイメージする自由の余地はどこにあったのかという点について研究することは、本論文の最も焦点をあてたいところである。

2. 松井翠声と『松井翠声の上海案内』

そもそも松井翠声とは誰か。その著書などに紹介されているところを、まず簡単にまとめておく。

本名は五百井清栄。東京本郷生れである。生家は祖母が江戸時代の大阪の豪商、淀屋辰五郎の家から出ているほどの裕福な商家であった。しかし、父親の代に家運が傾き、翠声は小学校の半ばで奉公に出た。写真屋、寺の小僧、新聞配達をしながら、錦城中学の夜間部に入学したが、昼間の勉強に代りたいことから夜の仕事を探した。それが弁士になる動機であった。当時牛込館にいた弁士、松浦翠波に入門。見習い弁士、松井翠声を名乗る。見習い弁士のかたわら、中学を卒業。早稲田大学英文科卒業後も洋画専門の弁士として一本立ちとなった。

映画界にトーキーが導入される以前は、特に洋画の弁士としてインテリ層に人気があった。1930年にアメリカに渡り、ハリウッドに行き、パラマウントのオールスター映画「パラマウントオンパレード」に通訳の役で出演したこともあった。1932年にはウエスタントーキーを日本に紹介、この方式で制作したオリエンタル映画社の『浪子』に徳川夢声らと出演した。1938年には東宝の記録映画『上海』の解説を担当し、中国にも行き、兵士たちを慰問していた。

現在、松井翠声を知る人はまれであろう。だが、松井翠声は昭和24（1949）年に始まったNHKラジオのバラエティ・ショー『陽気な喫茶店』に出演し、多くの人々を楽しませた有名人でもあった。『陽気な喫茶店』のレギュラーが終ってからも、『タレントスカウト』

4) 安沢隆雄『東亜同文書院とわが生涯の100年(愛知大学東亜同文書院ブックレット(1))』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2006年)他参照。なお、東亜同文書院の歴史的な性格については、今日においても「日本帝国主義の中国侵略のために必要な人材育成」機関であったと断罪するもの(『日特禍華史』第一巻、1987年)から「民間のビジネススクール」(『東亜同文書院大学と愛知大学』1993年)であるとするものまでその評価には大きな隔たりがあり、一定していない。書院の歴史は激動した日中関係に翻弄され、その性格も時代によって変化しており一義的にとらえることには無理がある。また、書院の侵略的性格を批判する中国の研究者も「学生の中には理想と現実の間の矛盾のため苦悶の状態に陥った者も少なからずいた」と指摘しており、「被圧迫中国の独立と、解放と、自由と、自由に尽くすこと」を理想とした学生たち、そしてそのような学生を育成した書院の主観的意図までは否定していないように思われる(高綱1997: 81を参照)。

『クライマックス』など、民間テレビ番組で司会者として出演し、茶の間でも親しまれた存在であった。

また、松井翠声は、第二次上海事変の起こる以前から、いろいろな記事を『モダン日本』に寄稿していた。たとえば、アメリカに渡ったこともあり、アメリカ映画についても非常に詳しい翠声は、「ハリウッド」(1934年1月号)という記事を書き、小説「唐人お吉の夢を見に」(1937年2月)という物語も書いていた。

さらに、河上徹太郎の年譜⁵⁾によると、1941年(昭和16)10月、「文藝銃後運動講演班」として、新居格、小林秀雄、林芙美子、松井翠声は、ともに1カ月間朝鮮旅行をしている。

1937年7月7日、蘆溝橋で日中両軍衝突し、日中戦争が勃発し、1937年7月29日、通州事件で、中国保安隊が日本軍民を襲撃・虐殺したことにより、日本民間人の中国軍に対する反感が倍増した。1937年8月13日、上海で日中両軍交戦開始、いわゆる第二次上海事変の発生である。その直後の8月25日から9月1日まで、吉屋信子が、専属契約を結んだ主婦之友社の特派員となって、まず「北支」へ、その後同年9月22日から10月3日まで上海を取材している。

このような戦火の中に、松井自身は上海についてどのようなイメージを抱えていたのか。なぜ特派員をみずから志願し、結局どのような上海を肉眼で見てきたのか、といった諸点についてここで検証していくことにしよう。

まず、「ニュース映画」という手法の登場が、松井を大いに刺激して激動の上海へ自らを駆り立てた。

松井は長い間弁士を務め、芸能界にも入っており、メディアの扱い方をよく知っていたので「支那人の宣伝に負けない⁶⁾」といった自信があった。ちょうどそこへ、「『モダン日本』のために特派員になつて上海へ行かないか？」(松井1938a:17)とモダン日本社社長から相談を受けた。さらに、そのとき、ちょうど「上海発同盟〇〇〇…」と毎日毎晩ラヂオのニュースを聞いていたこともあって、松井は上海に行く決心をしていた。そこで「行きます、今日でも」と言った「大変なハリキリ方」で返事をしたのだった。

松井は自信満々で上海へ赴いた。その年の11月と12月、2回続けて『モダン日本』の11月特別号と12月特別号に「戦火の上海に乗込んで」と「上海戦線突破全記」という特

5) 年譜 <http://www.geocities.jp/penginkk/kawakami-nen.htm> を参考。

6) 「私は日本の内地はおろか海外在住の同胞はもとより毛唐の間まで乗り出して、ニュース映畫といふ生きた證據を持つて喋りまくつて歩きたいと、その方法、勿論軍資金の問題ですが、なんとかなればチャンチャンポーズの宣傳なんかには負けない自信があるからやつてみよう」と色々計劃を建てて居た時であつた」(松井1938a:15-16、下線強調筆者)。

集記事を発表した。その記事が、その翌年、栗田書店から『松井翠声の上海案内』というタイトルで出版されたのである。全147頁で三部分に分けられ、「戦火の上海に乗込んで」、「上海ルポルタージュ製作日誌」そして「上海案内」と続く構成となっている。

もっとも旅行ガイドらしいタイトルは、その第三部「上海案内」で、全体の40頁を占めている。他の二部について見てみると、「戦時下の外地」の描き方は、吉屋信子とよく似ている。その他の項目はやはり、本のタイトルの「上海案内」に比重をおいたもので、例えば、「乗り物」、「チップの話」、「電話」、「映畫館の話」、「競犬」といった話題である。戦火の中の上海に松井はいったい何を見たのか。「不衛生」「不潔」「支那人嘘つき」「抗日」「無教育」「外国人」等々、お馴染みの他者認識パタンのオンパレードとはいえ、そこから浮上してくる日本大衆の日常感覚における上海イメージを丹念に追跡しておくことは、きわめて重要である。松井が日本大衆を代弁し、代弁された松井の上海イメージが、その後また反復されていくからである。

もっとも、これらはすべて状況を伝えているだけではある。『モダン日本』の編集長菊池寛は、雑誌に対して非常に明瞭な要求があった。「刻々に変化して行く現代日本を表現して行けばいいのである⁷⁾」、としていた。そうした変化に応じて何が「興味本位の雑誌」を構成するのかといえば、創刊時は「モダン」の方に「興味」の力点はあったのであろうが、いざ「戦争」となれば、それは「モダン」を凌駕する格好の素材となるであろう。すると、結果的に「生活」を基盤とした読者の「興味」をそこに引っ張っていくメディアとなるのが、この雑誌の存在理由となっていくことになり、この雑誌がどのように1930年代における「興味」の変化を映し出していったのかを探れば、「自由で開明的なモダニズムの日本」から「統制的軍国主義的なアナクロニズムの日本」にどのように変化していったのかを知ることができるだろう。松井の時局対応的な上海案内言説は、そうした文脈の中で読まれるべきであると私は考えている。

7) 「最初、「モダン・ライフ」と云ふ名で出す筈のところ、再考の上「モダン日本」とした。「モダン・ライフ」では、ただ生活様式にのみ關係することになつて、内容がうすつべらになる嫌ひがある。「モダン日本」ならば、何でもは入ると思ふ。刻々に変化して行く現代日本を表現して行けばいいのである。しかし、我々は最初の計劃通り、主として生活、實際科學、娛樂、趣味、を中心とした興味本位の雑誌に編集するつもりであるが、しかし雑誌は生き物であるから、それ自身どう云ふ成長をするか分らない。だが、常に最も先端的な知識と趣味とは代表して進んで行きたいと思ふ」(菊池1930：1、下線強調筆者)。

3. 「八・一三」事変直後のシャンハイ・イメージ

本節では、松井の上海案内記の中のシャンハイ・イメージを具体的に取り上げる。

『モダン日本』の1937年10月号にも、以下のように、支那による「宣傳」のうまさについての松井の記事（発言）がある。「自分の宣傳については、支那人ぐらい上手な人種は世界にない。いかなる嘘でも、まことしやかに、誇大に言ひくるめて、巧みに吹聴する本能的な技術を心得てゐる。これは、支那人特有の民族的性格だ」（松井1937：(10)：100、下線強調筆者）。

さらに、「どの位奴等が嘘がうまいかといふ事は、支那に孔子や孟子などといふ男が出た事によつても判るでせう。といふのは支那の奴等は片つ端から嘘つきで泥棒みたいな者ばかりだから、その中にたった一人か二人あんな當り前な事を云ふ奴等が出て目立つたのです。日本で孔子や孟子が出て日本人はみんな偉くつてみんな正直だからちつとも目立たなかつたでせう。…これはあまりあてにはならんかも知れませんが、その位彼等の嘘は徹底してゐます」（松井1938a：34）。

戦時下であるので、当面の敵が嘘つきだというのは、当然であるにしても、それを民族的人種的国民的性格に仕立て上げてしまう傾向は、20世紀がだいぶ過ぎても、そこに19世紀的民族主義人種主義があることを端的に示している。

このように他国民を蔑み嫌うという形態は、西洋近代ナショナリズム、そしてことさらに文明性を強調する帝国主義的な「文明と野蛮」の世界認識にすでに現れている。それは、「～人は○×だ」といったパタン認識を繰り返すことによって自らが「～人」であることを再強化していく過程の一環としてあり、その極端なかたちがナチスドイツによる「ユダヤ人の計画的虐殺」などに結果していくことになるのであるが、ロシア人がフィンランド人やポーランド人を豚のように扱い、欧米人の多くが日本人を猿と蔑むといったようなことは、西洋近代との接触点であった上海において、特に拡張されていったのかもしれない。

その意味でも、「シャンハイ・イメージ」を探るには、まず、英語の Shanghai が動詞であることを確認しておかなければならない。松井の「上海案内」には、「Shanghai といふ字は誘惑、胡麻化しといふ意です」とある。『ランダムハウス英和大辞典』にも、①「(暴力・麻薬・酒などを用いての) 無法な手段で船に連れ込んで水夫にする」、②「暴力(脅迫・ペテンなど)によって徴発する」とはっきり書かれている。この英語表現がもたらすイメージは、その後の近代日本における「シャンハイ・イメージ」に反復されることになった。こうした動詞的用語法を日本語的表現に置き換えれば、「Shanghai (上海) する」ということになる。

牧逸馬、林不忘、谷譲次の三つのペンネームを使い分けた、大正、昭和期の探偵小説家谷譲次は大正14年4月、雑誌『新青年』に「上海された男」という短篇を発表した。そ

の物語自体は「上海」と直接関係はないのだが、「上海された」というのは「殺された」、「殴られる」などと同じ意味で使われている。

なぜ、モダン国際都市「上海」は、暴力・麻薬という語彙に繋がったのであろうか。川村湊は「"シャンハイ"された都市—五つの「上海」物語—」（川村湊1988：254）で次のように述べている。

…少し考えれば、上海という街こそ、いわゆる外国勢力に「上海された」都市であるということができないのではないだろうか。強い酒やアヘンによって、生体をなくさせた中国人から無理矢理に奪い取った土地。「犬と中国人入るべからず」という制札が立てられていたというパブリックガーデン（黄浦公園）。イギリス、フランス、アメリカ、日本の外国人たちに租界として分割され、植民地都市として支配された街。それは意識のないままに拐かされ、それぞれの「租界」という名の檻によって囲いこまれた土地、街なのであって、中国という国の中から、上海という土地そのものが列強国によって、強制的に取り上げられ、拉致され、そうした宗主国人たちのための苦役に就かされていたという意味では、まさに「上海」された街だったのではないか。

1920年代の短編小説が使用する「シャンハイ・イメージ」の川村（1988）のこの解析は、それまで日本でよく知られていたことへの一つの「確認」に過ぎない。

この種のイメージは、すでにその半世紀近く前から日本人の言説の中には繰り返されてきた。たとえば、このイメージは、福澤諭吉が1860年代に見て、『西航記』や『唐人往来』に記した上海にも符合する。

そして、それに前後して渋沢栄一が、『航西日記』に「欧人の土着民を使役するさまは牛馬を駆逐するに異ならず、督励するのに棍棒をつかっている。われわれが市中を遊歩すると土人が集まってきて往来をふさぐ。口々に雑言をはいてやかましいのを、英仏の取締りの兵が来りて追い払うと、潮がひくように去り、しばらく休むと、また集まる。そのみっともない有様はいやなものだ。」（中野他編1961：297）と記した上海の光景とも、実によく重なっている。そこで渋沢は、イギリスの植民地経営の巧みさに感心して、それが「華学」を刻苦研究し、中国の「治体風俗より歴代の沿革、政典、律令は勿論、日用文学まで精究し、其の書を訳し、その説を著し、大事業を遂げる其人乏しからず」、「文明の素ある、人心の精神ある、學術の上に従事すること、乃国（イギリス）の強盛にして人智の英靈周密なる所以を徴するに足れり」としている（小島2002:108-111）。

つまり、「シャンハイされる」ことがすなわちオリエンタリズムの対象となることなのだという帝国主義の現実を、福澤や渋沢はより正しく認識していたのである。

帝国主義間の国際政治において日本が「シャンハイされる」危機は常に存在した。「尊

大自恣」な対応によって半植民地化された19世紀半ばの中国をめぐる日本人のイメージは、眼前の典型的な「反面教師」に他ならなかった。それから半世紀以上を経て、そのイメージは次第に「シャンハイする対象」として形成されるようになっていく。

松井がいう、「ロンドンでも紐育でも桑港でも支那街と言へば殺人團、賭博團の巢窟で常にその筋の手をやかせて居るのだが、それが上海となると本場本元だから相當なもので、英語でシャンハイといふ字は誘拐とか誤間化すとかいふ意味があるのを見ても一通りや二通りの物騒さとわけが違ふのである」(松井1938a: 18、下線強調筆者)、というロジックからすると、「上海」は「犯罪の源」となってしまう。実際、戦前日本の書物を探っていくと、これらと類似な言説はたくさん残っている⁸⁾。この種のイメージは、すでにその半世紀近く前から日本人の言説の中には繰り返されてきたことになる。

戦前日本人による上海関連の言説の中に「嘘つき」以外に最も多いのは「不衛生」のイメージ(印象)である。これに「支那人の嘘つき」のイメージが重なっていく。それは1862年の「千歳丸」調査員日記⁹⁾の中にも、日本思想家文学家¹⁰⁾、日本児童の作文の中にもともにみられる。この上海に関する「不衛生」のマイナスイメージは、「八・一三」事変の時に同じように重複して強調されている。「八・一三」事変後、松井の描く上海の「不衛生」イメージは、またどのようなものであったのか。

まず、彼は以下のように、すでにそれ以前にも渡航経験のある上海に対する印象を率直に述べている。「夏は焼けるやうに暑く、冬は大陸的に甚だしく寒いといふ氣候の上に、まるで衛生思想がないんだから、セキリ、コレラ、チブス、ペスト、傳染病なら全部取揃へてある。」さらに、「そのうへ水道の水でさへ安心しては飲めない程水質が悪いから始末にいけない。豫防注射をして行くと言つても、斯う澤山あつては身體がまいって終ふ」(松井1938a: 18、下線強調筆者)。

とはいえ、彼が『モダン日本』社の特派員として受けた任務は、やはり、事変後の上海の様子をレポートすることであるので、筆はいきなり、ゲリラ戦術¹¹⁾に飛ぶ。「諸者諸兄

8) 「上海は危険な土地である。租界内で、しばしばピストルの音をきく。工部局の巡捕は常にピストル或は鐵砲を持つて武装してゐる。旅行者の特に注意す可きは、たとへ租界内でも夜おそく、一人歩きをしないことである。どんなところで、どんな危険が起きるかわからない。又たとへ晝間でも、租界外の支那町は、概して危険地帯と見なければならぬ。特に南市の十六鋪、閘北、浦東、揚樹浦等は最も危険である。この5行ほど短い文章で、「危険」という言葉は4回も繰返し出ている」(無署名1931b: 2(11): 367、下線強調筆者)。

9) 佐藤三郎、1984.『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館、参照。

10) 福澤諭吉『西航記』、洪沢栄一『航西日記』、芥川龍之介『上海遊記・江南遊記』、谷崎潤一郎『上海見聞録』、吉屋信子『戦禍の北支上海へ』、新居格編『支那在留日本人小学生綴方現地報告』など。

11) 1938年5月26日毛沢東「持久戦論」発表。

妹よ。先づ皇國の兵隊さん達は、ゲリラ戦術なんてやつかいなものを向ふに廻して戦ふ他にもこれ丈けのつかいなものを征服しなければならないのでありますゾ」(松井1938a: 18)。

さらに、「長崎から連絡船で僅かに一昼夜、黄色ににごつた海の水が、そろそろ上海に近づいた事を知らせる。日本と支那との間が斯くも近い事を知る時、今更の様に、空爆に依つて早くも敵飛行機に徹底的な打撃を与へて呉れた我空軍の偉力を思ふ」(松井1938a: 18-19) といった「日本兵隊さん万歳」の描き方は、吉屋の「ここは、すでに上海戦のニュースでお馴染の呉淞砲台の沖、そこに、この船は、驅逐艦に守られて、安全に一夜を海上に留るのだった」(吉屋1937③: 99) といった記述や、上海居留日本人小学生尋六の綴り「事変の思出」の「船の上には日本の飛行機が輪を廻がきながら、いつまでもいつまでも私たちを見送つて下さいました。軍艦ははるか遠くまで私達を守つて下さいました。何といふ私たちはしあはせでせう。日本の国のありがたさを思ひ、兵隊さん方のおおんを思つて、いつまでもいつまでも上海の方を見つめてみました」(新居編1939: 256-257) といった記述のトーンと、良く似ている。最も興味深いのは、この「日本の国のありがたさを思ひ、兵隊さん方のおおんを思つて、いつまでもいつまでも上海の方を見つめてみました」というところである。

「八・一三」事変の前、彼にとって印象的であった上海イメージの一つは「不潔」であった。戦後上海の街の状況を報告しながら、結局この「不潔」に戻るかたちとなっている。

一本賣りの安煙草を吸っては眞黒な唾をそこら中に遠慮なく吐き散らしてゐます。痰に唾は所嫌はず散らばつてゐます。普通の往來で立派な着物を着た一流の紳士風の男が、シュンとばかりに手洗をかみます。相当熟練してゐても時々指にぶら下る事があります。そんな場合本人ちつとも騒がず、悠々と傍らの電信柱にこれをなすりつけます。だから上海へ行つたら迂濶に往來の電信柱に凭りかかつたりしてはなりません。丁度手の高さの所には鼻クソや何かでギラギラ光つてゐます。…而るに一見燻んで汚らしく見える日本人街は、街に入って見ると往來には唾もなく家々は隅々まで掃き清められ、清潔好きの日本人の心配りが街の隅にまで行き渡つてゐます。ここでは電信柱のギラギラ等はありません。是を要するに外は木綿のボロを着てゐても褌だけは新しいものをしてゐたいと言ふ江戸ツ子みたいものです。向ふは白粉や香水やオードコロンで胡麻化して半年も一年も風呂に入らない連中とは一寸内容が違ひます (松井1938a: 45-47、下線強調筆者)。

松井翠声によれば、「上海の町は眼で見ると先づ鼻と耳から感じられます」(松井1938a: 116) という。これは、異文化体験の基本法則であり、日本人の対外認識の第一

の古典的な関門である。

「臭い」と「嫌い」とでは意味が違う。言うまでもなく、「臭い」は鼻に不快なおいを感じることで、「嫌い」はいやがることである。意味が違うのに、しばしば同意語のように使われることがある。この人間の感情と「臭い」とのメカニズムはどのように解明すればよいのか、これも難しい課題である。西欧人についてもその体臭が忌避の要素を構成するのであるが、アジアの諸都市についていえば街の「悪臭」である。「臭い」とイメージとの関係について論じられることは少ないのであるが、松井の独特の記述はそれをよくとらえている。また、そこから空間感覚の差異へ観察視点を移行させている点も興味深い。さらに、次のような記述が続く。

支那式の便所の香ひが町中に漂よび耐えきれないものがありますが、本當の上海の臭ひは此處に來なければ分からないのでせう（松井1938a：106、下線強調筆者）。…一般の劇場もこの城内に負けないほど不潔なものです。窓を開けてトンネルを抜けるほど喧ましい伴奏音楽に合わせて金切聲を張り上げる俳優達、それをまた嘸したり、べちゃべちゃ喋り乍ら觀の見物達、ボリボリ音を立てて唾と一緒に吐き出す西瓜の種等、トーキー効果は百パーセントでありますその不潔な中で上海の劇場があのだス黒い、誰が使つたか分からない胸の悪くなるやうな匂ひの着いた蒸タオルを呉れないのが、せめても我々外人の見物客は大助かりです。それにしても支那の娯樂場の便所は到底耐えられないものです。圍ひもなければ屋根もありません。いきなり圓い桶が並んでるでそれへ人々は腰をかけて用を足します。その用便中の人達は右の人に話しかけたり左を向いて聲をかけたり、讀み了つた廣告や新聞を隣の人に渡したり、彼等にとつてはかうする事が一つの社交方法なのかも知れません（松井1938a：113、下線強調筆者）。

「支那式の便所の香ひ」、「胸の悪くなるやうな匂ひ」、「支那の娯樂場の便所」などの中国上海に関する「不衛生」、「汚い」、「臭い」といった言説は、高杉晋作の日記に最初に現れて以来、約百年の間、日本の普通庶民の世界にまで及んでいる。不衛生、汚い、唾をはくといった支那人・上海人の行為についての言説は、常に反復されていた。「支那」のよるような反面教師と対照的な存在として常に「立派」で清潔な模範である「日本」がいる。

この衛生問題は、必ずしも日本が西洋化・近代化したために生じるわけではない。日本人の清潔好きは有名で¹²⁾、最近、「孔子は痰を吐いたか？¹³⁾」という研究もあるくらいで

12) 幕末に来日したフランス人公使レオン・ロッシュの日記に、ちり紙や手ぬぐいなどを巧みに使い小奇麗にしている日本人に、他のアジア人には見られない一種の特性を見出している記述がある(鳴岩1997参照)。

ある。中国における「汚い」環境、状況というのは、裏を返せば、中国では古くから人口の密集するような都市化が進んでいたということでもある。この日中戦争の最中に、再び、中国の衛生観念について糾弾し、最も中国を貶す好材料として使う一方で、日本民族の衛生観念上の優越感を隠さず表明するというパターンは反復されている。

「衛生」と「教育」は、それぞれ「文明と野蛮」を対比させる重要な指標であるが、その中で自己を文明におくというオリエンタリズムの手法¹⁴⁾も、松井の言説には遺憾なく発揮されている。

「尤も支那人は殆んど字の讀めないのが多いですからこのスーパー・インポーズものを観に来るのも相当インテリに限られてゐます。後は純然たる支那英語で、これは支那語でトーキーになつてゐます。しかし大體その製作するスタジオがふ完全で、それを見せる大衆が低級すぎる為映畫は大概荒唐無稽な忍術ものや馬鹿々々しい豪傑物語で殆んど見るに耐えないやうなものばかりです」(松井1938a: 60)。

上海から映画が日本に入ってきたことを知る松井にとって、どのような映画製作が行なわれ、どのような観客がいるのかは当然の関心事であった。そして、大衆が形成されるメディアとしての映画娯楽が日本ほどの隆盛ではなく、大衆が「低級」で「荒唐無稽な忍術ものや馬鹿々々しい豪傑物語で殆んど見るに耐えないやうなものばかり」といった評価に行き着いている。これはその後の「香港映画」への評価と通底するところがある。

しかし、必ずしもそれは正確に当時の上海における映画産業の実態をとらえたものであるとはいえない。実際、その頃、上海映画界を支える大きな裾野は形成されており、たとえばディズニーが日本で紹介されアニメーターを育てる契機となるのも上海を経由して起こった出来事なのであった。また、当時数少なくない抗日映画も製作されていた。

松井は文章の中で、何回も「中国人は大半の人は文字は知らない」と強調する。「…文字の國といはれてゐるのに、支那人で本字の書けるのは、支那五億の民衆の中で僅かに八人か九人といふ事です。後はみんな餘り國が廣いので發音や方言が違ふため、英語だとかフランス語とかいふ外國の言葉をお互ひに話し合ふといふ不思議な現象を呈してゐます。ですから苦力共に至つては殆んど字といふものが書けません。で、この字書き屋さん手紙や何かを讀んで貰つたり、返事を書いて貰ひに来るのです」(松井1938a: 121)。

むろん、当時文盲が多いことはたしかに事実であり、識字率をいかに高めるのかという問題は、近代中国の一貫した課題であったが¹⁵⁾、急速に識字率を高めた当時の日本におい

13) 2007年10月24日、中央大学人文科学研究所における研究員深町英夫「孔子は痰を吐いたか——国民党の新生活運動と中国の伝統思想」研究報告。

14) オリエンタリズム批判の有意性は、そうした言説自体の欺瞞性を構造的に暴き出すことによって、そうした言説の文脈的位置づけをより明確にするところにこそある。

ても、「代書屋」は存在し、当時でもまだ大分残っていたはずであろう。これも設定条件から導き出した私の推論の一つの帰結であり、統計上の数値の扱い方をどうするのかにもよるが、「字書き屋さんに手紙や何かを讀んで貰つたり、返事を書いて貰ひに来る」といった環境は、実際日本でも、日本の戦前を描いた部分もある『おしん』などのドラマにおいてもしばしば登場する。

こうやって近い過去の遅れた姿を投射して日本の優位を語る語り方は、これも相手を劣位におく典型的な手法であって、松井のレポートの随所にみられる。松井の観察はさすがに中国人社会内部を奥深く知らなければ察知しえない、そうした細かな違いを識別するまでには到ってはならず、実到大雑把なものに留まっている。したがって、綺麗か汚いか、正直者か嘘つきかといった単純な分類の中に収めようとする思考が働いてしまう。それも、上海では「植民侵略者」として入り込んでいる日本人の立場からの話題の範囲内の内容に留まっている。

さらに、戦時下であれば「抗日」に視線が向かうのは、当時の状況からいってごく自然であるが、それはどのように松井の眼に映じたのであろうか。

「一般有識階級の青年は上海の町で排日抗日の特別教育をほどこされ、誤まれるその教育の為に抗日すなわち救國の基であるといふやうに盲信するやうになつてゐます」松井① 1938：41、下線強調筆者。「抗日」を教育の結果としてとらえることは、日本側ではすでにかなり一般化しているのであるが、それは中国の「一般有識階級」だけの現象であるということ合理化するためのようである。それは、教育のない、無知蒙昧に放置されているような圧倒的多数の中国一般民衆は「抗日」など唱えるわけではないのだと了解することによって、心理的バランスをとっているのであろう。圧倒的多数の中国一般民衆が「敵」であるという認識に到れば、とても正気ではいられないからである。むしろ、これら虐げられた中国一般民衆のために大日本帝国は立ち上がったのであり、真の敵は欧米帝国主義なのだという自己欺瞞によってようやく上海に立っていたに過ぎない。

…彼等の生活に排日が如何に深く入り込んで居るかが解ると同時に、この町をつぶして本當によかつたと思ふのであつた。抗日、排日の文句が半永久的にペンキやなにかで、壁や建物や戸に書いてあるし、あらゆる排日運動の計劃が茲でなされて居たといふ證據が次から次に出て來た。…實際彼等の排日の根強かつたのには驚きますよ。見るもの讀むものみんなこれだからね。兵隊さんは案内してくれ乍ら言つた。『でも子供たちは矢張り日本びいきでね、こんなものもありますよ』見ると繪と字がコンビで書いてある。—

15) 中国では1950年『常用簡体字登記表』を編集し、1956年に『漢字簡化方案』を正式に公布した。

一日本人といふ字の下に亀の繪が書いてある。『つまり亀だから、日本萬歳の意味だらうね』兵隊さんがつけたした。ところがアニハカランヤ、これも甚だおだやかならざる事柄なのである。『兵隊さん、これは馬鹿野郎で事ですぜ』と説明してあげた。支那では龜なるものは甚だケイベツを現すものとして英語のサーバビツチに當るのである。途端に兵隊さんはくさりにくさつて曰く。『支那の排日は行き届いてるね!』(松井1938a: 70-71、下線強調筆者)

こうした観察の細やかさが、レポーターとしての松井に大いに期待されているところなのであろう。「でも子供たちは矢張り日本びいき」と誤解している兵隊の能天気な鋭く批判しながら、教育の結果として支那の子供まで日本軍嫌いが浸透している事実をちゃんと伝えているわけである。

何れにせよ、このように、戦時上海の光景を、日本の一般庶民にも分かりやすい眼差しで、よく見えるような印象的な風景に切り換えていく作用が、松井の言説にはある。そのうち、社会関係の最も弱い環を成している「子ども」が、異国の訪問者に一定の印象を与えるメディアとなる。松井が「支那の子供」に着目しているのも頷ける。そこに登場する「支那の子供」はそうしたメディアの役割をよく表出している。

…或日、所部隊を訪ねた。『今日はケーレー』と自動車めがけて集まつて來た子供達が口々に云つてゐるので面喰つた。『今日は歸れ』は御挨拶だと思つたら、『今日は敬禮』の間違ひと解つた。なるほどさう云へば、小童等は手を舉げて居る。…子供たちは合唱した。大歓迎である。何日の間にか村の子供は兵隊さんのお友達になつて、こんな日本の歌まで覚えてしまつたのである。『キャラメル、どもありがと…』歌が終わると一人が手を出した。…『子供たちは日本人のお客さんがあるとキャラメルを貰へるものと相場をきめてますのでね』兵隊さんの一人が却つて赤面して説明して呉れた。恥かしいのはこつちのことで、こんな可愛い子供達の居るところへ、お土産を持たずに來た事を申譯ないと思つた(松井1938a: 68-69、下線強調筆者)。

後に日本敗戦後の東京で、アメリカ占領軍に「ギブミーチョコレート」と群がる日本の子供たちの姿を見ることになる松井は、この「キャラメル、どもありがと…」というフレーズを、記憶の底から呼び覚ますことになるだろう。この部分と関連して、松井が「解説」を担当していた『上海』というドキュメタリー映画に登場する「日本人学校の生徒たち」の映像を想起し、それと対比的にこの光景をとらえていくと、リアリティはさらに増すものとなるに違いない。

松井に軍事上の知識が十分あったかどうかは疑わしいが、松井の描く「戦場の風景」は

その後の日中泥沼の戦争状態を考えると、まだ牧歌的な段階であったようにも思える。上海自体が「前線」であった時期は短かったためかもしれない。

…随所に和やかな日支親善の風景を展開してゐます。ある所では日本人が通ると子供達が駆け出して来て、『お手々つないで』と歌つて聞かせたり、敬禮をしたりして頻りに我々の行く事を懐かしがります。歸つて来た農民達には農作に経験のある兵隊さんが、農事の指導をしてゐます。寶山縣城では一村全部が親日村で、外の土地が荒れ果て々るにも拘はらず、此の附近ばかりは綿の収穫や、…そこでは軍人の器用な人がゐて、町の集會所の中庭にオルガンを持ち出して子供達に日本の歌などを教へてやります。非番の兵隊さん達に支那遊戯を教はつて遊んだりしてゐます。…

「解放者」として振る舞うことによって自己合理化している日本の上海占領は、さまざまな演出が必要になる。

上海市档案馆資料 Y6-1-389 (共26頁) の写真には、「支那良民は楽しく暮してゐる」「宝山県の日の丸部落」「上海の宝山縣城に日の丸村が出来た。」「村の人達は皇軍を信頼して野良仕事や機織りにいそしんでゐる。無邪気な子供達もやさしい日本の兵隊さんによく馴ついて唱歌のお稽古や遊戯に楽しい日を送つてゐる。白地に赤く日の丸染めて…オルガンに合わせて片言の唱歌が空にひびく。戦火漸く遠のいた上海郊外、早くも微笑ましい日支親善の交驩風景が展開された。」…といった、松井のルポを裏づけるかのようなキャプションがつけられている。また同資料には、「皇軍の征く所草木も、靡く…」とする一ページもあった。

すなわち、「東洋平和を乱す悪敵に対しては一步も假借しない我が無敵皇軍も罪のない良民や婦女子をいたはり愛すること親の子に対するが如しである。／戦火に終はれて避難してゐた住民も、支那軍の掃滅によつて自分達の故郷が平和になるや先を争つて歸来、まづ日本の軍隊に心からなる親愛の情を捧げ、子供などはたちまち我が兵士達に馴つき慕つて、たちまち美しい日華親善の風景が展開される。／又我が軍の捕虜に対する態度は何處までも仁愛を旨として、歸順した敵に対して傷の手当、食物の配給などに心を配つてゐるので、悪軍閥の下に在つて貧困の生活を続けて来た支那軍は夢かとはばかり驚き喜んで、中には自ら我が軍門に降り来り、軍夫の役を勤めてゐる者すらある。」…というのである。あたかも「解放軍」であるかのようなこうした日本軍の振る舞いは、占領政策の理想型としてはあったかもしれないが、実際にそうであったかどうかはむろん疑わしい。

さらに、松井は、「上海については、いろいろの人がいろいろの方面から書いたり話したりしてゐますが、何れも夫々の面白い所を含んでゐます。けれども全部について云ひ盡すといふ事はとても出来ません。それほど上海といふものは複雑を極めた街です。支那特

有の迷路や、不思議な生活様式が、いはゆる謎の町上海の色を濃くしてゐます。…私自身、數回上海へ行きまして色々のものを見たつもりですが、やはりその極く小さな一部分しか見てゐないと思ひます」(松井1938a:101)。

「やはりその極く小さな一部分しか見てゐない」という松井のこの自戒のことばは、解放軍であるかのように自己演出をしている日本軍の単純さが、上海では通用しないのではないかといった暗示も含んでいるように解釈できる。同時に、それを裏づけるような上海の複雑性を強調する言説でもある。

むすびに

松井の戦時中の上海取材したルポにより当時上海の状況がよくわかる。松井の眼に映った戦時下の上海は、つねに、不潔、流行病の多い、犯罪的、無教育、外国人も非常に多く混沌としている街である。だが、そうした「上海」の中であって、日本人はいつも質素で、礼儀正しく、きちんとしていて、戦場においてもいつも勇敢であるという、一種のパターン認識の共有があったことが、ここではっきりした。それが軍部の強制による共有であったというより、さまざまな宣伝教育の結果として、自発的な構築イメージとして共有されているらしいところが、実に興味深い。

しかし、ここで不思議であるのは、なぜ、大人の男性である松井も、小学生たちの上海に対するイメージの語り方とみな同じパターンであるのかということである。どう考えても可笑しなところが沢山ある。「戦時下」という幕を外せば、かれらが抱えていた、本当のシャンハイ・イメージがより露わになるのかもしれない。

たとえば、松井の場合、戦時中の上海を取材し、雑誌に戦時下の上海の様子を記事にして載せたのだが、そのなかには滑稽で出鱈目なところが多々あったのではあるものの、松井がもっとも感心し、関心を寄せているのは、「モダンな上海」、「国際的な上海」であり、誇らしきそれを抜きにしては「上海」を語ることはできないのであった。つまり、「上海」を代表するような、競犬場、ナイトクラブ、ダンスホール、カフェー、映画館、売春宿などといった娯楽施設は、戦時下にあっても語られなければならない何か、なのであった。

彼の上海イメージには、やはり「ダブルスタンダード」が存在する。そして、さらに興味深いことに、松井は上海の街を見歩いて、甚だしく不愉快なところがあったにも関わらず、上海の街を離れる時には、「なにがしか後ろ髪を引かれる感じがする」、と記していることである。彼自身にも、この心を惹きつけるものが何であったのかが分らないままに、上海について記していたのだということになる。

《参考文献》

- 芥川龍之介. 2001〔1925〕.『上海遊記・江南遊記』講談社文庫.
- 川村湊. 1988.「"シャンハイ"された都市—五つの「上海」物語—」『文学界』(42):254-279.
- 菊池寛. 1930.「モダン日本に就て」『モダン日本』1(1):1.
- 高崎隆治.〔解説〕.2002.山下武・高崎隆治監修『上海叢書 第6巻』大空社復刻版(松井翠声.1938.『松井翠声の上海案内』栗田書店).
- 高網博文.1997.「岸田吟香と荒尾精—東亜同文書院の源流—」日本上海史研究会編『上海人物誌』東方書店81.
- 谷崎潤一郎.1926.「上海見聞録」『文藝春秋』(5)(再録:1973.『谷崎潤一郎全集 第10巻』中央公論社.本論文ではこちらに拠る).
- 鳴岩宗三.1997.『幕末日本とフランス外交—レオン・ロッシュの選択—』創元社.
- 中野好夫他編.1961.『世界ノンフィクション全集 第14巻』筑摩書房.
- 新居格編.1939.『支那在留日本人小学生綴方現地報告』第一書房.
- 西部均.2006.「近代上海を地理学するための予備的考察—在留日本人をめぐる研究展望と上海ガイドの紹介を中心に—」大阪市立大学都市文化研究センター上海サブセンター編『近現代の上海・大阪の空間と社会』【大阪市立大学大学院文学研究科21世紀 COE プログラム—都市文化創造のための人文科学的研究—】43-64.
- 平野純.1991.『上海コレクション』ちくま文庫.
- 広岡今日子・榎本雄二.2006.『時空旅行ガイド大上海』情報センター出版局.
- 福澤諭吉.1980.『福澤諭吉全集 第19巻』岩波書店.
- 松井翠聲.1937.「支那はどんな宣伝をしてゐるか?」『モダン日本』(10):100.
- .1938.『松井翠聲の上海案内』横山隆.(山下武・高崎隆治監修.2002.『上海叢書 第6巻』大空社復刻版).
- 安沢隆雄.2006.『東亜同文書院とわが生涯の100年(愛知大学東亜同文書院ブックレット1)』愛知大学東亜同文書院大学記念センター.
- 吉屋信子.1937.『戦禍の北支上海を行く』新潮社(長谷川啓編.2002.『戦禍の北支上海を行く<戦時下>の女性文学1』ゆまに書房復刻版).

《参照映画》

- 亀井文夫編集・松井翠声解説.1938.『戦記映画復刻版シリーズ 上海—支那事変後方記録3—』東宝映画文化映画部制作.

《その他》

- 上海市档案馆資料Y6-1-389(共26頁)